仙台の災害の歴史

仙台藩と疫病

仙台市博物館　学芸普及室　菅原　美咲

第1回

東日本大震災から十年を迎えるにあたり、本号から四回にわたって仙台地域の災害の歴史について紹介します。

医療技術が進歩した現代は、感染症の原因である細菌やウイルスが「見える」ようになりました。しかし江戸時代以前の人々にとって疫病（伝染病）は天災と同様に原因が「見えない」災いの一つであったため、その原因を疫病神や物の怪、虫など「見える」ものに代えて対処してきました。

仙台藩主もかかった天然痘

天然痘は古代から度々流行し、人々に恐れられた疫病です。疱瘡とも呼ばれ、高熱に加えて体中にできた発疹に「うみ」がたまり、「あばた」として残りました。伊達政宗も幼少期にかかり、その後遺症で右目を失明し、のちに独眼竜と称されました。

仙台藩九代藩主伊達周宗も十四歳の時に疱瘡にかかりました。江戸の仙台藩邸には、他大名家から病気見舞いの使者が次々に訪れたほか、幕府からは医師の来診や、将軍からの慰問の書状も届きます。藩内では藩主の大事とあって、仙岳院・龍宝寺・定禅寺・良覚院・大崎八幡宮など主要な寺社が病気の回復を祈禱しました。発病から約一月後には仙台にいる藩士や領民から回復を祈るお札が江戸に届きます。仙台藩の正史である『治家記録』には、罹患から約半月後、疱瘡が治癒した際に行う酒湯（酒をまぜた湯での湯浴み）の記事が見られ、さらにその三年後に十七歳で病没したとあります。なお、ほかの記録では周宗は疱瘡で死去したが、十代藩主伊達斉宗への後継が済むまでの三年間、その死を秘したといいます。いずれにしても、疱瘡は死亡率が高い疫病の一つだったのです。

疱瘡への対処には、寺社での祈禱のほか、疱瘡神が嫌うとする赤一色で刷る赤絵などを見舞いに贈ること、また、疱瘡神を除けるとされた蘇民将来や鎮西八郎為朝への信仰などがありました。江戸時代後期になると、予防法として種痘の接種が各地で行われ、仙台藩では名取郡北方大肝入であった小倉三五郎がその普及に尽力しました。

鍾馗図　東東洋筆　共生福祉会蔵
鍾馗は疫病神を追い払うとされた

江戸時代のインフルエンザ流行

享保十八年（一七三三）六・七月頃、インフルエンザの一種とみられる流行病が各地で流行し、仙台藩内でも死者が出ました。特に江戸では大流行し、参勤交代で江戸に詰める仙台藩主や藩士たちに大きな影響を与えました。藩邸では、七月に五代藩主伊達吉村の世嗣である伊達宗村（後の六代藩主）がかかり、江戸城への登城といった公務の欠席が続きます。

吉村は息子宗村の罹患を憂いて、祈禱師に流行の収束を命じました。また、藩主の給仕や側近くに仕える藩士のほか、警備を行う足軽まで広く罹患したために公務に支障をきたし、代役で凌ぐなど苦しい状態が続きました。藩士の中には病をおして勤務する者、罹患した藩士や下級の足軽たちに薬を配る医療支援を行う者もいました。このように、吉村が子息を案じ、流行の収束を願う気持ちや、職務の遂行と仲間の支援に奔走した藩士の様子には、現代の私たちにも共通する部分があるのではないでしょうか。

旬の常設展2020 冬

特集展示

福島美術館の優品

令和3年1月31日(日)まで開催中

資料名(各部分) 左:若衆・花魁図(花魁図) 忠岡三千子筆、
右:四季の花図 熊耳耕年筆 ※全て社会福祉法人 共生福祉会蔵

「特集震災10年−災害を生きた人々」ほか

令和3年3月21日(日)まで開催中

資料名(各部分):鍾馗図
狩野古信筆
仙台市博物館蔵

【観覧料】一般・大学生 460円、高校生 230円、小・中学生 110円
※新型コロナウイルス感染予防のため、ご来館の際にはマスクの着用にご協力をお願いいたします。

仙台市博物館
SENDAI CITY MUSEUM

▶1月の休館日　年始(1日(金)〜3日(日))、毎週月曜日(11日は開館)、12日(火)　▶開館時間　9:00〜16:45(入館は16:15まで)
▶博物館ホームページ　仙台市博物館　検索　※開館状況など最新の情報は、博物館ホームページをご覧ください。
▶博物館ツイッター　@sendai_shihaku　〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地〈仙台城三の丸跡〉　TEL:022-225-3074